



里見八犬傳 第六編 卷卅七



~13
709
88



門遠 13
 號 709
 卷 88



明治三六年
 十月九日
 購求

南總里見八犬傳第九輯卷之三十七

東都 曲亭主人編次

第百六十四回

殘兵又と奪ふ窮君を賣る
 水軍艦と寄せく敗將を載る

再説大田小文五郎頼順の寄隊第一番の猛者と云ふ上水四郎東三と馬を相
 寄せ棒を合せく他雜もせを戦ふ程小東三竟腕疲れて連の嘯は所か既に
 危く見ゆ久又寄隊の陣中より一個の騎馬武者馳出を首見れば是も亦末三
 劣らざる大漢や。蚌眼虎鬚骨逞しく面黒多身身草紙の鎧褰て腰
 三尺の大刀と跨る小大鐵を執りける。百魂奇多銀の左纏の縮額く胡意
 兎を被る。徳而這猛者馬を找めく。道つ隨小聲震立て上水鎮は我代
 人。東の千士萬卒今我赤熊如半太猛勢。本事を見よと喚りく。

八犬傳九輯卷三十七

馬を馳よき。鐵を振閃し、小文五只と只一撃の斬んを。既而く大田小文五只の左
右の敵を受れども、毫も怖るる氣色なく、左を柱、右を中り受て、流し流れて
敵より神出鬼没の多し、盡き人馬の進退一致して、兩敵の器械を打拂ひ遣返せ
生木の棒ハ翩々と死虚空の閃く如く、孰を其と分る。閑戦園へけり、寄隊の
士卒も重見の諸兵も、呆然とて酔るが如く、空しく長観て在り、任而上水
和四郎、今一雄の帮助を以て、疲勞れ、氣力を勵し、相夾きて、敵を多し、其れども
小文五只、這兩敵を左右に受り、精神始々増して、度も鬼の勢、以て誰より勝
とあり、今一雄、唐山之國の初、北冀州の刺史表紹、萬丈無當と負、二
勇士、顔良、文醜、関雲、長と戦り、も、思ふ、奮、激、突、戰、細、小、名、狀、志、を
盡し、既而して大田小文五只、這兩個の勁敵を、思ひ、隨、小、疲、勞、し、甲、乙、俱、腕、の
乱る、透を、以、て、一、矢、と、嘘、に、く、敵、を、棒、を、束、に、柱、る、不、違、る、く、鈍、も、頭、を、破

と敷かれて、頭鎧も骨も碎け、ん、苦と一聲叫び、果は馬より、控と、墜る時、小文
五只、生木の棒の中より、弗段と折き、く、小文五只、早く、束を、鐵、棍、棒、の、杪、と、扱、て
地上に、落さ、れ、合、留、り、程、も、あ、り、且、赤熊、猛勢、朋輩、の、仇、逃、き、と、叫、び、扱、る
鐵、の、く、大田、頭、を、敵、と、ま、る、毫、も、透、を、あ、き、ま、り、け、り、小文五只、馬上、不、身、を、反、其、
猛勢、が、敵、を、鐵、見、入、寬、外、れ、く、小文五只、乘、り、方、馬、の、鬃、鬣、を、以、て、頭、を、柱、地、と、斬、落、せ、
那時、遅、し、這時、速、し、小文五只、我、馬、の、所、ら、れ、て、仆、ま、ん、と、老、時、仆、も、果、が、身、を
飛、り、て、今、束、を、放、れ、て、あ、り、け、り、馬、の、閃、と、乘、相、り、く、那、八角、を、鐵、撮、棒、を、振、上、り、
多、も、見、せ、れ、赤熊、如、年、太、猛、勢、の、右、肩、尖、頂、骨、被、り、方、の、儘、し、て、敵、を、く、ハ、ハ、ハ、し、て、堪、在
る、ハ、死、猛、勢、ハ、肩、骨、摧、け、て、握、り、持、り、鐵、見、と、落、し、て、人、馬、共、侶、不、地、上、不、控、と、敵、
伏、ら、れ、て、を、伏、息、ハ、絶、不、り、然、ハ、大田、が、這、日、の、拵、死、敵、も、自、家、も、目、と、敵、馬、に、其、
緒、を、接、ん、と、欲、さ、る、者、今、登、時、大川、莊、の、執、方、麾、を、ら、揮、り、鬼、を、く、と、土

卒と找る軍の潮前時とよけれと勇む登相山八郎満呂復五郎再太郎安西
就介のハハと之雜兵勿武者不至るまぐ皆洪水の衝く如く又大山の崩る像
く吐と揚る城の聲と俱前後を相争令く面も振らる鎗の尖頭を揃て寄
隊の陣中へ突蒐り衝顔も勢ひ小誰の中る死寄隊の萬夫も提れりと然し由
負しく思ひ上水と四郎赤熊如牛太と大田不敷もせき力を喪ひ勢ひ折けく
忙然と又大川不先と駈られ始て事の起りごとく散馬に乱れて辟易を一
陣既不敗れて大將自胤原胤久も又立直まてと返せと吸るの逃隊士
卒も誘引れて傾れ後陣へ辟れ蒐れ朝良も憲重もあつ什麼となく不制
びくもあらぬれ竟不惣敗軍を多りかけ然り見の二大士の逃る上寄隊を遠く
迂程と士卒を喚返させ人馬を取令く五本松小在り敵の雲葉を陣
營へ入替りて士卒の軍功を尋る不登相山八満呂親子安西就介們の餘も

諸士分捕まりとあられも大田が那二勇士と較り果して寄隊二萬五千の胆
意と拘はける其武其功よ及ぶ者あつむ莊介あれを嘆賞して且小文五不
向ひくゆを和殿今日の拵は和漢の傳まきとて是を敵にゆえ自家
六七千の小勢とと二萬五千の大敵と只一呼吸の殺顔甘し和殿一箇の力不
依れり我及ぶる所なれども和殿の當陣の上將でもあつ士卒の為不白愛を
始終の勝と思ひぬるや縦其功ありとも匹夫の勇を事として敢士卒を讓
るるとる那二功敵と戦ひぬいと危くとも危くも危くも危くも危くも危くも
近づて前を飛と和殿防ふ由る人孔子の語道不似れども愚心立忌の及ぶ
所をのちのちの後の為と理の演で諫れ小文吾听々感服して教諭宣示
其理あり我も亦始と思ふふわねとも那上水と四郎赤熊如牛太其名
粗劣なる猛者なれども將衡と村倉の果敢多く鼓されて良干も亦危く敵

尚勝の不棄るるる今日の閉戦いゝゝあらん勝敗の事を知らん故に我己を
仍に一臂の力を盡すのも敢て武士を見りて譽を求めて匹夫の勇を好むを
れど和殿の諫を千金を我行を知る不足れり御向今井の戦ひを和殿殺殺の
も林を且追る將衡を趕りて寄隊の大軍にたけるを思はるを失を
多く参りて敗して副將の席を就むを禁む難し我身を得今も正使の
上坐を汚す我も亦今日の閉戦を危殆と見るを且殺殺を事とせ依て和殿を
倍々漫不節の御本意を背はる者不似る這失を那失不易て今の侍
御使の上坐を返すまあらん見ると推薦を其身に又故のど副將の席を就
りて其小の云と一重時を推辭し理の當然不争難く僕那意を盡すを
又立替りて正使を做りて謙遜辭讓義を礼の及此美事を辱すを
者免るり開中の登桐良干の情地満呂重時と遠天士と評すを大

田の力諸大勝り且武勇の餘りも智不足る所あり又大川の智計
あらん武勇大田伯仲を替り及ぶもあらん館の人を知らん良將の
御坐其田と川と二天との正副の二將を做りの餘りを所をて是足
る所を補ふ御軍配りけを那二天士に居るを送り其小過をて或の
正將の席を讓り或れ正將の席を返して其褒貶と士卒を示す則是忠
臣の真面目といふも大川大田が教伐の一舉の館の御本意を違ふ故に必ず
く敗して俱不行といふ事皆勝利を得る也人通て行はし飾りぬる
稀る小愆を及行を愆として必ず敗す心操を馮けれ意を大田が今
日の舉動匹夫の勇と知るが那便宜とて大川正將の上坐を返すを其
所をと叫ぶ感を重時の敬服して登桐の精評も三日の朝早天大川
危言を當れりと稱はる間話休題悠而の次の日七日の朝早天大川

莊人の大田小文吾と俱おとこ五本松の陣じん堂どう在あ。先まづ斥候しやくこうを遣つかて敵てきの出でる處ところを
知しりて其その斥候しやくこう馬うまを走はりて其その斥候しやくこう隊たいの兩りゆう國河こくがを背そむけし
南本所なんほんじよの陣じんも其その軍兵ぐんべい初はつめ劣せうら猶なほ二萬にまん四五千しよせんありと報はつるに莊しやう人にんら
亦また小文吾せうぶんご小談せうだんを其その言ことば既すでに託たくす。即すなはち登のぼり相あい
諸士しよしと召より聚あるに寄隊よせたい昨日けふの戦いくさは痛いたく敗績さいしんありしに
ね、尚なほ橋角はしかくの勢せいを張はるべし。計はかりるに寄隊よせたいの兩りゆう大將たいしやう也なり。二萬にまん五六千しよせんの大兵たいへいあり。自
家けと他たに比ひべし。二に分ぶん中ちゆうてその一ひとも足たりるべし。夫それ小兵せうべいとて大敵たいてきを
破やぶりて放はなすに奇きをなすべし。敵てき一日いちにち人馬にんばを息いせ。明日あしたは必かな推おし寄隊よせたい
之これ然しかに明日あしたの戦いくさは必かな寄隊よせたいの軍兵ぐんべいを分わりて合期がうきを定さだむ。自よら朝良あさらと
橋本はしもと志しし。登のぼり相生せいせいの隊たい兵へい五百ごひゃく名なと從したがふ。今いまより今井いまいの柵さくへ入いりて那里なの頭人かみ
朝經あさね俊故しゆんこの我計われけい畧りやくと相あい合あはす。各おのれ其その隊たいの軍兵ぐんべいをば。明日あしたは早はや天てん墨田川すみだがはへ赴むかひ

之これに涉かりて其その勢せいを張はるべし。其計そのけい策さくの箇あ様やう々々と情なさけやふ解とし。小文吾せうぶんご
俱おとこ小文吾せうぶんご我われ妙見めうけん嶋じまの柵さくと守まもるに士卒しよその四百しよひゃく名なあり。今いま那里な要もとるに那柵なさく
速すみに皆みな火ひを放はなち焼却やうけつす。其その兵へい毎まいもて今井いまいの柵さくと守まもる。今いまより今井いまいの
柵さく在ある所の軍兵ぐんべいも又また朝經あさね俊故しゆんこの從したがふ。墨田河すみだがは畔ほとりに向むかふに足たりるべし。其そのを二に四百しよひゃく名な
分わりて和殿わだんの隊たいも加くへ。然しかに和殿わだんの隊たい兵へいも八九はちく百ひゃく名なあり。只ただ神速しんそくを重おもく妙めうに
あらしめて。急いそぎに良よく竹たけ然しかにと言ことば兼ありて退ひいて從したがふ隊たい兵へいを待まちり及および各おのれ足たりるに信しん
せんと云い捨て騎馬きまの鞭むちと鳴なりて今井いまいの柵さくへ走はりて。介すけ程ほどに寄隊よせたいの酷こく敗績さいしん
せ。折せ折せ南本所なんほんじよの陣じんと建たて。散ちりて士卒しよそを待まちり。幾いく程ほども聚あるに令しやう軍兵ぐんべい
敢あて初はつめ劣せうら姑なほ且また英氣えいきを養やしなひ。其その次つぎの日ひ。十二月じふにがつ。兩りゆう大將たいしやう朝良あさら自亂みづかり。即すなはち憲重けんじゆう亂みづかり
久ひさ方の光黨ひかりとう兵頭べいとうと聚ありて再戰さいせんの意見いけんを向むかふ。大石おおいし憲重けんじゆうの言ことば。憚おそるに公こうの
ね。約やく莫な昨日けふの關戰せきせんは平葉殿へいようだん自家みづかの勢せいと上水かみづ赤あか能のりの勢せいと負まかり。

由断よりて敗軍及びの然りければ猶幸ひ不士卒小傷損平るれ敗れるの之故の
如し必明日の閉戦を當家先陣に我先度の恥を雪ぐる易くやくのんといふ
たり親論を自胤の恥する色も頭を低て黙然と朝良をうちて石見を意見
定不介人明日は是十二月八日あり我老館水路より安房の船村の城を攻捕す
と謀より議者のひ約束の日に至れり然りと這里に總兵小敵を破難て水陸の閉戦
合期せ異見我何ぞて老館に見合せ明日は必我先陣して那二天士の首を
下し軍隊配定ぬるといふ憲重里再議及及る兼りひ敵の大勢をよむと又も猶
小心ありと今宵先陣謀見を那遣遣して敵の虚実を撈らんと且明日
兵を二天士と生拘り其隊配の角様々如此々々の仕と又朝良領
終く其謀を任せけり憊而其詰朝寄隊の惣大将扇谷五郎九朝良の
先陣とんと兵頭入間九郎佑啓松山五六郎尚永と先鋒の頭人にて且萬戸

つらつちあはれす月十字七の益と副とも又宿尻城戸小建隆の雄兵一千を従せ五本松の這方
多茂林中の埋伏して閉戦闘るん時横鎧を入れよと是を諸兵先を
其夜中の中遣りけり他の千葉介自胤原胤久を後陣として朝良憲重
先陣と惣軍二萬五千餘騎既り十月八日朝未明に人馬を繰出さんと
時昨夕大石憲重が敵の虚実を撈れを遣せ間謀見多かちて報るを
听し里見の二天士義任悌順の反り千葉殿の石濱の城を捕んと一萬餘騎を
二隊に分ち小支吾悌順の柳嶋と墨田河をうち渉り石濱を攻伐んと
介義任の五千の雄兵を領り尚五本松不在り但是の地は這地の民皆里見の
従ひ二天士の隊に附んと欲する者少く又千葉孝胤主も里見の謀に合さ
せり日るも出陣志望と云土民の巷談右の如し敵其加勢をゆるめ風く伐
破りあはれ難義及及びせんと云其言孰も紛れなれば朝良憲重驚愕して

さてもとどろふ。船々軍使と走せり。自胤の信と告れ。自胤の亦駭慌らみ。つら
朝良の陣營もあて談まき。つら。如く敵の軍配得難義の及んと。石濱の
城。我宅着あり。且幼少の兒子と在る。尚萬一の事あり。後悔腑を噬むも
及。孝胤の風聲の。この地に出陣せ。地の御士。凡民もあひ。那隊も加
る。其間。咱も柳嶋のち向。那里の敵。伐破ら。然れ。我隊兵。加
勢の士卒と借。詞急迫。請求。朝良。憲重。異議。ある。不。答
。隨即。扇谷の兵。頭。引。船。綱。一。郎。師。範。を。頭。人。と。し。雄。兵。七。千。名。と。授。る。自。胤
。尚。一。人。も。言。う。む。と。欲。り。て。御。高。陣。中。の。囚。措。る。相。馬。郡。領。將。常。の。隊。兵。三。谷。柿
。八。郎。足。脱。号。百。十。數。名。と。赦。して。を。も。從。へ。ん。と。請。ひ。ぬ。朝。良。則。饒。あ。け。り。是。は。も
。自。胤。の。隊。兵。と。加。勢。の。野。武。士。上。水。和。四。郎。赤。熊。如。牛。太。の。送。兵。と。共。に。一。萬。餘
。名。自。胤。を。二。隊。分。り。て。原。胤。久。を。後。陣。と。し。信。而。千。葉。介。自。胤。一。萬。有。餘。

士卒とてみ。先陣。馬を。柳嶋を。投。て。い。と。程。小。里。見。方。加。の。隊。長。者
。持。備。杖。朝。經。大。樟。村。主。俊。故。へ。昨。日。大。川。井。壯。の。計。策。と。受。け。し。も。朝。二。隊。の。兵
。一。千。四。五。百。名。と。從。て。墨。田。河。原。造。下。と。小。梅。三。田。の。道。邊。來。り。け。り。時。自。胤。向。お
。これ。を。見。て。他。ハ。必。里。見。の。奴。們。が。墨。田。河。原。を。ち。涉。り。て。我。城。を。攻。ん。と。て。來。り。ぬ。ん。と。不
。敵。小。勢。之。駭。破。り。て。奴。ハ。兵。毎。の。と。鞭。を。り。指。示。し。馬。を。走。ら。せ。り。從。ひ。騎
。馬。も。未。武。者。も。皆。後。れ。と。ち。向。ふ。其。勢。ハ。極。め。急。之。の。時。朝。經。俊。故。ハ。逆。期
。を。る。事。を。れ。敵。の。近。つ。を。見。え。り。て。今。來。身。敵。の。旌。表。ハ。月。星。の。元。號。を。向。ハ
。でも。あ。れ。千。葉。介。の。大。川。主。の。計。る。所。毫。も。錯。ハ。是。這。圖。入。れ。り。兵。每。備。を。疾。力。と
。喚。り。共。侶。敵。と。逆。令。銃。丸。を。飛。し。箭。を。射。し。て。寄。せ。立。回。を。透。し。と。敵。を。と
。を。當。下。千。葉。介。自。胤。の。先。鋒。の。頭。人。引。船。綱。一。郎。師。範。の。隊。の。兵。一。千。餘。名。を
。魚。鱗。不。備。へ。有。と。被。せ。射。れ。由。突。げ。も。物。と。も。せ。競。を。蒐。る。激。波。の。勢。ハ。當



八代傳九郎卷三十一

文徳堂藏



八代傳九郎卷三十一

文徳堂藏

小文吾小梅
自亂を破海

るべしものありし自胤も亦推續して馬に麻毛を揮り先度の恥と今時小
雪ゆきへ何を待たれりと烈し下知に従ふ士卒五六千各先を争ふ草馬直小
推蒐るを朝経と後故の深田と前小茂林と後小敵の脚を立させ去る矢種の
涯り射く斃せし敵も視小餘る大勢を朝経も後故も其刃火小挑難て竟小
穂頼も做えし毛活外里見の伏兵二匹馬の西の方一葉最敏は枯草蘆の中よりと
忽馬と連放り火銃の音殺しく千葉の士卒と幾名斃敷く小敵も自胤を自胤
劣るその隊の頭人登相山八郎良千八百近に雄兵を找せ自胤の背より吐と嘯
死く斃し草馬も今ゆき負ひ不足する千葉の前後の敵も攪して自胤も
師に靴も存多く撥と辟死麻非は柱のぐもあつて後陣小續は原胤久佐と
見るより隊兵を找めて銃砲を放草馬々々勝誇りる敵も散せ自胤も師
範も亦よの新隊も勢ひをめて前後の敵も息も艱れ短兵急戦も程小又

忽馬と左右の枯草蘆の中も猛火起り煙の裏より頭れゆは是則別人を大田
小文吾憐順る一千有餘の隊兵を有く胤久が隊の真中も縦横も音尋小攻破る
一人當千向ふ前も武勇萬騎も拔草して人急境に入るごとく瞬息も回熟
類も又良千も朝経後故も士卒存一勇も奮奮も克戦する者も朝風酷
く吹風来て樹とあつて草もも猛火隈も燃廣るも逃る寄隊の路を断り火
花那隊も落蒐れ千葉の士卒の度を失ひて或も斃れて頭顱も喪ひ或も焼
まき野の小竹も然らぬも落立て胤久も師範も乱軍の中も斃れ是を知る
者もより開が中も相馬將常も残兵も有く渋谷柿八郎足脱們百十數名もあつ
且禁獄を赦されも當陣も馳入られも猶自胤も恨も始りして精戦せむ
豫其徒と惜々地も商量も有く千葉も血氣の勇も誇りて敗軍の士卒も饒
まきもの故も將常も本陣へは還るも風も逐電もを我知むと鋭く脚

小文吾こぶんご听々きこ且かつ然しか且かつ怒いか不堪たふさねども先朝せんしやう經つと自よ亂らんと受捕うけとらせら草烟くさけんの上うへ坐ま

 良よ千ちの心こころも果はぞ我隊わがたい兵へいと俱とも小突こつ然しかと身みを起たてし駭おど謀まく足あ脱だつ們ら小走こ走は鬼おにりつ

 打居うちゑて一人ひとりも漏もさ至いた結むす初はじりけり登時とうじ洪ふ谷や柿か八はち郎らう足あ脱だつ其その徒たと共とも侶り小慌こ慌わう聲こゑを

 呼よびよび我わが們ら何なに等どうの罪つみあらん欲ほす所ところの里さと見み殿とのへ反へん忠しゆして我わが大將だいしやうを生な拘とと進ま

 せられば今日けふの軍功ぐんこう第一だいいちをとんん非ひ如ごと然しかなるの賞やう禄りくのあらんんも擧あげられば

 せも果はむ小文吾こぶんごの眼めも入いる聲こゑ高たかやふぞれ這こ白はく徒た大だい胆たん入い若わ們らの相馬さうま郡領ぐんりやう將しやう

 常じやうの從じゆ兵へいをとんん我わが聞き相馬さうま將しやう常じやうの自よ亂らん主しゆの親おや族しゆ也なり則すなはち昔むかし未まの家臣けしん若わ若わ們ら

 是こゝ小仕こしへ自よ亂らん主しゆの陪へい臣しんへ縱た自よ亂らん主しゆ不ふ仁にりて恨うらみ思おもふもの戰場せんじやうより身みを

 免まれば故ゆゑ主將しゆしやう常じやうの性しやう方はうと尋たづねられば切きてものるん今いま其その軍敗ぐんばいるん及および情なさけ

 多おほく這こ君きみと犯ひして功こうを賣うりしるん是こゝ賊あか逆さか小異こ異いるん傳でんふん云いふん君きみとら

とらへば臣おん以も臣しんとらむんのあべり父ちちのおとらむん子こ以も子こたらむん抑おさ

 君里見きんりみ殿とのの仁義にぎぎを旨しとらむん我わが們らも殺伐ころはを敢あ好こむん尚なほ是こゝをも力ちから必かなずら

 何事なにとら思おもふん兵へい母はは多おほく其その奴やつ們らを幸あいひとらむん首くびとら列らぶん言こと苛こ高たかく下した知しれば良よ

 千ちの隊たい兵へい美みりぬと心こころ足あ脱だつと其その徒たと六む名なと牽ひ退ひけ且かつ推お越こすん則すなはち皆みな其その首くび

 知しれば是こゝを自よ亂らん主しゆと見みせられば當あた下した大田おほの小文吾こぶんごの自よ亂らん被おさられば親おや連つら連つらと解と

 捨すてられば上う坐ま推お薦すすめられば跪ひざ坐ま思おもふん今日けふの見み參ま儀ぎ六む條じやう見み

 武ぶがら娼お妓ぎ奸かん詐さの故ゆゑもらて身みのこ中ちゆうの禽とりの像さう他たが別わか亭てい小禁こ錮こすん楚そ

 囚いの怨うら小堪こむん登のぼ時ときのこ見みも知しられば同どう因いん同どう果くわの義ぎ兄あに弟あに大だい阪はん毛もう野の亂らん智ち

 復かへ難がた言ことの便べん宜いとらむん俱とも小那な里りと脱だつれば過あせられば里さと見み殿との小徵こ徴ちゆうれば久ひさしく

 然しか而しか今日けふ小至こ至しるん人ひと怨うられば今いま我わが私しの再また命いのち小和わ君きみを情なさけ地ち小石いし濱はまへ還かへりし

けんちんいふせし防禦の大任這躬に存り然に軽に情義の爲に重死君命を辱むをせん
權且安房人俱にあらん君の我に一介の舊因をあるあわねども何ぞ不情なるものぞ
況んや君重見殿の仁者へ必しも賓客の礼をせし迎らるべし其の美脚心易くると理
義明々地々慰れは自溜のく羞慚を憚然と羊胸許申さく不答るやう言ひ
趣定ふ余一我一方の將とて逆徒の辱を逢りける菲徳と思へ今やふ死にぞ悲
と做すの命運の致す所左も右も計れよとのひう嗟嘆小堪がけり當下又小文吾
士卒小下知して寺僧を請りて轎子二挺を借合ふ則是れ自溜と溜久を杖策
せし却良干と召て以せし和殿の君臣二名と今井の柵小おとせし士卒小宜く守ら
まへ溜久の深瘡に那里小至る殿師と招れ瘡を縫して且療治爲しぬれ
這餘の事の箇様々々と送もく宣示せ良干都てあら果て隨即二挺の轎子と
雜兵八名小解せし且隊兵小守せし今井の柵へのせし修ても小文吾の尚よの寺の

門前小存り躬に役僧と召よき寺跡と向へ役僧答く當山に則禪宗を他
生山一樹寺といふ小文吾をてらん馬憑む一美あり我の里見の防禦副使
大田小文吾頼順是れ約莫今日の開戦敵の戦殺の者尋らり自家中傷損る
此れわん俱に是悼むべし和僧の美を住持小修す這地方の吏役小課て件の屍骸と
當山小聚合て葬りあるべし其の美の住持小面談せし且地方の村正と召よき必課
ま死該氣も大敵小在陣を去向をいそぎ居るといふ宜通達を馬の
且件の埋葬の諸雜費の異日の沙汰小在ん其の美もあるひへとの躬に墨書
筆を添へ則證文一通を寫し取せて卒とたろ小登見を放ちて牽寺を
る馬小うち兼れ朝輝候故以下の従兵列を正て奔々と去向の更小大川を渡り亦
朝良を伐破らんと程勇なる者多りけし話分兩頭と日大川莊小義徳の
五千の士卒と三隊小分と尚五本松の陣小在り既朝日の昇り時候一町許離れて

寄せまゝ敵と待り程か其れハ馬より前百と東西と瞻仰て満呂重時を召て
 以て和殿の心屬を去向の左右存茂林は一虚一実何と云ふ右の茂
 林ハ敏衆鳴く鳥の聲も亦左の茂林ハ金剛細らも今孰視れば殺氣あふら
 立意必是左の方ハ敵の伏兵あるらん然い今日の閉箭ハ寄隊伴と逃走
 我みぐらと数人ハ和殿ハ逃る敵ハ拘り存茂林ハ衝ねか必獲るべけれと諭せ重
 時ハ感して隊兵ハ九百と引纏む胡意左ハ隊へりハ程ハ寄隊ハ穂大將扇
 谷朝良ハ朝副將千葉自胤ハ墨田河ハ敵ハ數千佛見も一萬餘騎を分ち
 授けてありハ然も亦久日ハ是ハ軍議ハ時移りて既ハ已牌ありハ朝
 朝良ハ心焦燥て穿る如く里見の隊ハ千葉孝胤ハ加勢してハ地の民ハ我ハ叛
 事の難義ハ承ぬハ敵ハ加勢の附ハ間ハ風ハ大士ハ數捕れも先鋒の頭人ハ間
 九郎佑啓ハ松山五太郎時永ハ葉萬戸月十字七ハ下知て諸隊ハ枝りり

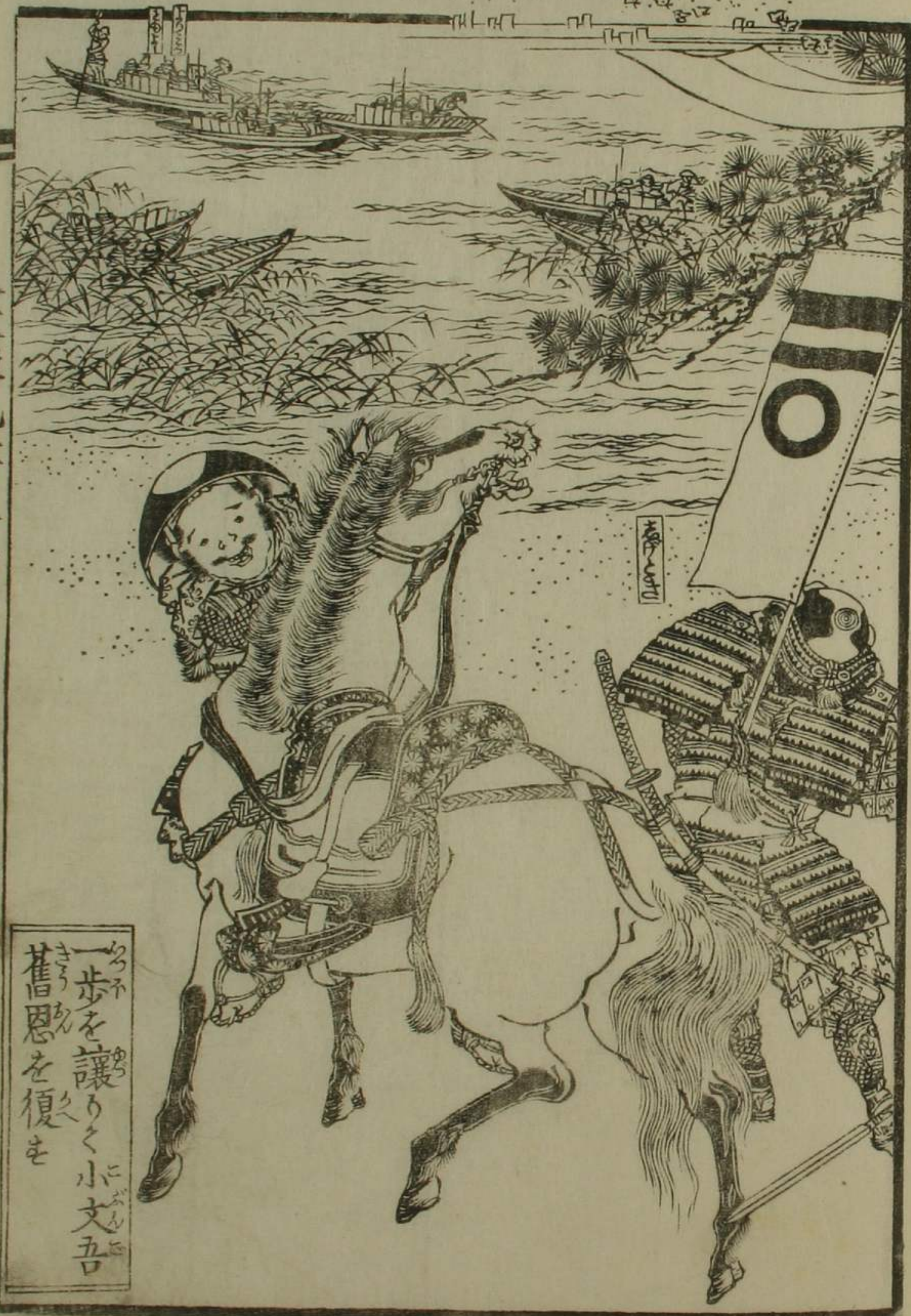
くらては行わたる時ハ永ハ五本松ハ推寄と前九ハ飛ハ敵ハ乱りて鎧ハ入ハ欲
 大川ハ先鋒の頭人ハ滿呂再太郎ハ安西ハ就ハ少年ハも噪ハ慌ハ俱ハ義任ハ教
 守りて隊兵ハ勵ハ進退賢く閉てハ用ハ閉ハ用ハ閉ハ用ハ閉ハ用ハ閉ハ用ハ閉
 どもゆゑが如く其機ハ稱ハあハ老ハ兵ハ勇士ハ是ハを幫助て連ハ挑ハ戦ハ寄隊ハ
 猶も誘引ハも豫憲重ハ謀リ隨ハ故意ハ敗れて逃走ハ信重ハ京重ハハハハ
 莊ハ亦推續ハ諸勢ハ奔一蒐立々々那里ハもと軒ハ不ハ登時ハ滿呂重時
 走る寄隊ハ自遣ハ九百ハ士卒ハ一度ハ與ハ吐ハ噓ハ左ハ茂林ハ三十三ハ綱
 入々ハ連放ハ鎧袍ハ透ハ由ハ其ハ駈立ハ目今ハ頭ハ出ハ寄隊ハ伏兵ハ不意ハ打
 是ハ付麻ハとハ敬馬ハ謀ハ走ハ敢戦ハ擬勢ハ或ハ敵ハ火鎧ハ鼓ハ付
 れ或ハ樹根ハ跪輓ハ己ハ刀劍ハ身ハ傷ハ伏兵ハ頭人ハ宿尻ハ建隆ハ
 己ハ名ハ負ハ不覺ハ逃ハ大路ハ半ハ里ハ先鋒ハ撞見ハ前後ハ敵ハ中

由るゆゑに乱れて逃走を復五郎重時が隊兵を馳て赴ふ程に寄隊の大將朝良突
 川莊久と挑戦ふその後に出まけり。介程朝良憲重の謀り伏兵合期せられ始に伴
 丁の敗北も竟ふ実の敗れあり。既危りけるに憲重才小装直して敵をなぐる突
 伏せく這里と先途と戦ふ程に朝良も俱ふるを盡して馬を東西に馳融し又南北に
 走る。近づく敵と射く外其近羽弱輩有名の者俱敵の前面に立塞りて
 主と佐けて命を涯に戦へども敵の名高る大士の一人文武兼備の防衛使の誰り
 雄飛せん主客の勢地を易て寄隊の防難を折ら。満呂復五郎重時の敵の伏兵を
 赴蒐る。樹間立潛れ直推す件の茂林より捷徑を走り早く寄隊の陣の後の方か
 出に逃る伏兵を赴捨る。九百有餘の隊兵をも疲れ寄隊の背より探合せ
 攻む。是も朝良憲重の士卒多く落亡し。懸過る杉の條に隊疎落れ作り
 朝良の幸くして一方と殺被死て兩國河を投ぐ逃走るを社社も猶脱さどそ。

満呂安西も先找り。柱る敵を伐り程に初逃る寄隊の伏兵宿尻城戸
 又建隆其隊兵一千餘名と共侶ふ。の時を返り返り先度の取を雪すと
 や思ひ以憲重の隊に加り。杖を俱戦ひける。是も依りく氣力ゆゑ。大石憲
 重入間九郎松山五六萬戸十字七等の俱朝良と延えと。猶残兵を獎して
 存一死力を竭す。その間寄隊の大將五郎朝良の徒近羽八九名を騎
 馬の左右に相立せ。落て兩國河原に來り。甚る野心の者の所為也。加たる
 船橋の断流され。船一艘もあらず。朝良近習と俱に。あを什麼とかならふ
 呆れて馬を駐り。四下と遙不見。穴の淺草河の方より。二隊の軍兵出來たり。
 是則別人を大野先鋒の兩頭人盾持兼杖朝經と大樟村主後故之既
 小梅を退陣の中途。又這寄隊敗軍の風聲早く。吹る。敵を漏す
 と。路を料り。今この河原に連り馬を走ら。其兵一千四百許。俱に前面を

うち見る小西國の河邊に主僕とかがりて騎馬と歩立の武者八九名を求めてお
 する他り必敗軍の落武者不疑ひず好物給りと隊兵を求めず首奪直に趕逼る
 勢に宛餓る虎彪の免不逢る異るれば朝良主僕敬馬に多し免るべし不
 只戰歿と鬼ひ決め馬を其方小推向く寄る敵を待り程小忽速東に
 相距ると二三町許る田中の茂林の裏よりして頭れ身一隊の軍兵も亦一十
 五百許其隊の將の騎馬の頭を颯と推建る旌小矢は花踊りて北越片貝
 軍代稲戸津衛由元と寫せし文字見えし朝良主僕含笑又活き
 歎心の俱小勇とけ然朝経も亦俊故も通小の旌旗の文字を讀みて他
 是豫脊く大川大田の恩人々遮其今り我私の遭際るぬ君の爲るは這聞
 戰小由元とく饒えや兵毎枚めと競るく蒐れ由元は先鋒の頭人妻有復六
 萩野井三郎俱隊兵を相找め刃尖より火をまて入乱れぞ戦ひける是時

稲戸由元馬の上を越えり立てなよ扇谷の人々をのまらるる在下界よりあれ權且這
 頭を退陣を風寒の疾病と養ひ小果を危窮の御役を連りゆら辰巳の河邊
 舟船ゆん今這敵を咱も不任と疾御曹司朝良不俱一まの深川の海畔へ赴て船を
 求め渡さるるをよと叫れ朝良今更捨ての免さるるをいふ然御事成
 せん兵每續け馬を找めり由元の陣中へ馳入り力と勳して其開戦を資助け浩然
 満呂復五郎重時大石憲重以下の敵を戦ひ既小克し又朝良を追伐んも隊兵九
 百を従へ尋ねて其邊不來より折ら朝経俊故が隊兵をの稲戸津衛由元
 と開戦正不閑を過不見り左右を找ま馬を間道へ乘走りせ由元の陣の後
 より矢丸を飛して敷き乱れ破竹の勢に急りければ北兵是小驚馬に慌て後を防は前より
 攻られ前中より後より破り前後の敵を度を変ひて河へ追隊せられ或は疾攻
 負い命を預る乱軍の中身を躲して逃去りも亦勘くれば由元憮然と嗟嘆して



一歩を譲りて小文吾
 舊恩を復す



小文吾

我始より這敗軍と思ふゆゑに今陣殺の覚期の上へ然りとて死をいとく我偶
 の君の俱へて竟極果さぬ異日我大刀自御前のさす歎きあつめ疾の必を
 退れ津と求るあくとわらと思ふ心を如此と朝良不告け喘る謙り目今妻
 有復六と枝野井三郎が残兵も立直と敵を防ぐ戦ふ程由元と心る朝
 良不俱して只あの三騎の河原へ添ひて震も津と尋て渡りて其のいささ
 東のよりの忽焉と又赶来ぬ一隊の敵ゆり是則別人を大田小文吾悱順へ雄兵
 千二三百名士卒先なる馬を走せ近々隨不聲高く那里より密隊の大將朝良御
 曹司をゆりせむ。信云我の里見の防衛使大田小文吾金碗悱順より正る敵の背を
 不せむと王僕疲れ馬を任せて那里へと欲落ゆ開方不路る者返して勝負を決
 せぬと喚りて赶来ぬ吐嗟とるらち驚見る今朝良と其侶相戸津衛由元馬次
 佐輔哩と乗旋りて逆小文吾に向ひて絶て久大田生を知らぬ我は是北

越の由元我今和殿と敵取りと這里中戦殺すの素より望む所なれ争何せん
 偶再度の危窮と極めて俱へあせし這脚曹司朝良我腹大刀自御前の外孫を
 人のたれ和殿の為我身と俱へ蜻蛉の命空くする我信恩の倒ま今日仇敵を是
 豈自他の本意を和殿那義を存せいで一步を譲らんと請ふ小文吾うちぞく
 馬を駐め答るやう開いりもその中を任日大川柱介の報恩三舎を避くとぞ我
 美一許之を條をあ不便をゆるさ仇りく恩を報んや曩も必死の后を思ふ今我防衛使
 大任の那再生の恵も在り則和殿の賜もあれとの今日の闘戦は寡君の大事は御前
 我私の恩義をりて何て敵の大將を討つ代も己と申さんぞとらひりも腹を殺
 志二條の空前を合ひてさす刺さる能奇固めて標と射る夫局錯由元の乗る馬の
 脚を射れて嘶きさす挫と依り去肉と下存の程もあさげ又の空前朝良の馬の額を
 射られて主共侶不轉轉六由元驚馬に立ちて杖けをさす掖起せ幸申して志の

朝良は且蓋て疼痛を忍びて立けり。當下大田小文吾只従ふ隊兵を見たり。我
 馬疲劣れぬ前中亦盡り且窮乏逐へては汝等一霎時總とて又詞をも託
 り忽地後方騎馬武者あり是則別人を備呂復五郎重時へ當下重時
 聲高より答るる。大田主大田主和君今怒不那甚憎不難とてあ用捨の心あり
 とも唱言不任に代りて去向略る江畔中より入る敵の敗將を見捨てるまじ
 ちんや昔昔今今恩も情の時とて依らる我生拘ると見えと暗に後隊兵
 聚ふと聲して馬小拍れて甚奮真趕鬼れ小文吾の呼嗟とをり喚禁を聞き
 る時重時の既北兵們不戦い克く猶朝良を趕んそ則る速早其隊兵をおく目今
 已の多ることりて大田主意衷も猜せり代りて朝良を追ふけり小程小橋由元わ
 大田が仁義も再生なく朝良を扶掖せり。中々遠くを亦復一隊の敵兵我を
 追蒐來りあり房總防禦使後陣の隊長満呂復五郎重時あり在り返せくと

吸らる其兵約莫八九百名徒然として赶逼る勢い猛く見えり。朝良と由元の
 目と注せり嗟嘆して稍龍尾と免れ來て亦這虎腮の逢り今も是また大田の
 刃のちん限の敵と殺して戦死せしむる及ぶと相契して立逆へんと身と構は折
 くる這江の処々の敵あり立る枯草蘆の中より快船一艘忽焉と漕卒來て水際不
 寄せし其公高師が喚るる。喃御曹司の御坐。御伴當も共侶の疾風の船に乗
 らせり敵近つていそと疾々といそと朝良と由元も有る言見たり。鄙語不
 以津の船の疾し不堪され敢一句一言の回答を違わぬ身と跳らせり。共侶の伴の
 船に乗徒れ公高師棹を令直してちん漕へ漕生を程しゆわを重時の衆平先
 たちて馬を馳り趕りて來り既水際へ届る時那船の漕碎れ及ぶるもわかれ續く
 隊兵を見たり那見と敵脱れぬ我隊より人魚の膏油を多く身が凍されぬ江を
 四だく趕りとも敢凍を漏るると平料る敵の篙師と共ふ才の三人の波と潜りく

那船を敗れ、那奴們を虜せんとし、馬より降りて下立、鎧の袖と吊腿を解
捨んとし、喘る程又見る、這江の頭を処々の枯草廬の中より、突然と漕りて出、
艦十艘許、其艦毎、援甲する武者百十名、兼、都く二百個の軍兵あり、其艦の
建する所の渡瀾の板より、敏しく、波を晃く、鎗鋒、眉火の刺、昇る月の影、似たり、然
件、の艦より士卒們の皆、朝良由元の乗る快船の前後左右、うらうら、
と、真々、西に投て、漕去り、その時、日の没果て、膺々と見え、
重時、且、呆れ、且、送恨、ふ、堪、敵、援、の、軍、兵、
と、甲、斐、や、の、已、ぬ、哉、と、嘆、折、り、大、田、小、文、吾、
と、胸、休、ぬ、猶、重、時、を、諭、さん、と、隊、兵、を、
報、る、や、う、在、下、剛、才、朝、良、の、
元、を、う、ち、載、て、も、も、澳、へ、
江、を、泗、で、其、船、と、
又、十、箇、の

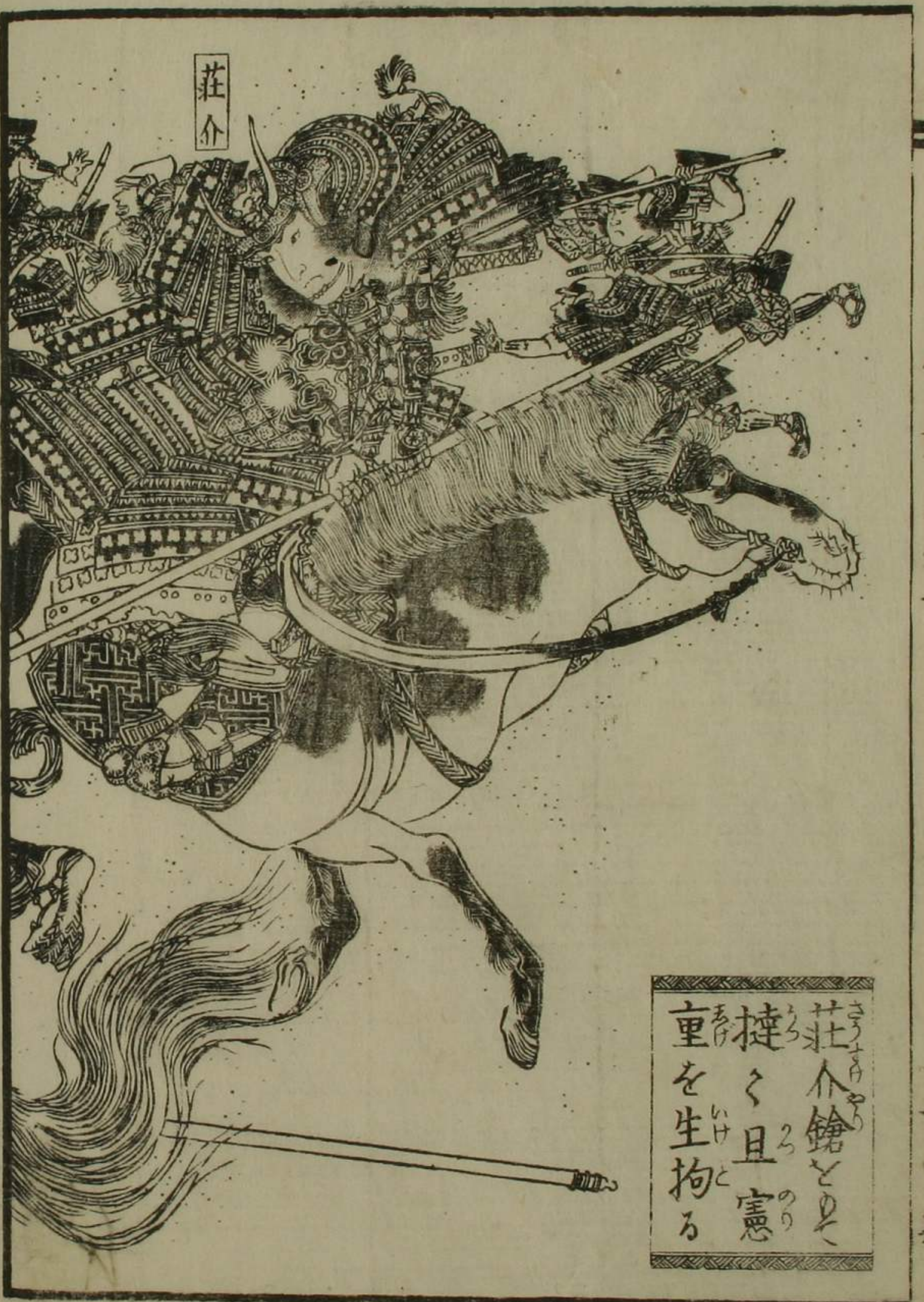
戦艦あり、其艦毎、援の軍兵、都て、三四百名、
援兵をゆく、我身、人魚の奇、
甲斐、わ、下、と、思、ひ、
益、て、大、功、あり、
自、衛、と、虜、を、
功、を、
君、不、仕、へ、
恩、不、叛、
然、
人、の、撞、見、
箭、の、猶、
勝、れ、り、
美、を、思、ひ、
と、諭、せ、
重、時、感、服、
と、稱、へ、り、

然これは是これより後々のちを大川大田おほがわおほのが報恩ほうおんの椿事つばきごとと傳つたへ美談みだんとを中ちゆうの識者しやく者或ある評ひやうきく。那時そのとき莊しやう介けい小文吾せうぶんごが俱ともに舊恩きゆうおん舊義きゆうぎを為なす由元ゆげんと射やて殺ころす。昔唐むかし山姬周やまひめしゆうの時衛ゑいの庾こ公こう之斯このごとが鄭ていの子濯孺子このしやくじゆしと射やす。事ことと又江尹えいしん商陽しやうやうと陳ちん并疾ひやうしやくが吳師ゑしを追おひ事ことも似にたり。且庾公こ之斯このごとの師し因よる為ために輪りんを扣ひた金を去さす。のく空あを前まへを蔑あり。子濯孺子しやくじゆしと射やす。孟もう子し離り婁ろう。あを莊しやう介けいが鏃やくを抜ひ棄すす。由元ゆげんの旗はた緒つと射やす。心こころ操をと相あ同どう。又工尹こうしん商陽しやうやうの只ただ呂りよ重じゆう時ときと其隊そのたい兵へいを皆みな相あ從したがへ。朝經あさね俊しゆん故こ隊たい兵へいを憶おもひ俱ともに嗟なげ嘆なげして由元ゆげんを饒にと朝あさ事ことの趣おもい告つぐ。朝經あさね俊しゆん故こ隊たい兵へいを憶おもひ俱ともに嗟なげ嘆なげして由元ゆげんを饒にと朝あさ良らと漏もらせし恨うらみるを亦またゆへに重じゆう時ときが徳とく々と大田おほのの意い衷しゆうを告つる。及および大おほ家け感かん服ふくを亦またゆへに然しかどもその時そのとき自家そのけの與よ軍師ぐんし大田おほの毛野もうの胤いん智ち豫よ計けいる所ところあり。小文吾せうぶんごの元もと重じゆう時とき朝經あさね俊しゆん故こ隊たい兵へいを是これを悟さとる者ものをゆへに并ひらを甚し摩まを。原はらる小始せうし洲しゆう寄きの陣じん營えいあり。毛野もうの胤いん智ち行ぎやう徳とく只ただ寄き隊たいの大たい將しやう胤いん谷こ朝あさ良ら千葉せんせ自胤しよくいん相あ從したがへ加勢かせいの隊長たいしやうも亦またゆへに大川おほがわ大田おほのの恩おん人ひと多おほ。稻いな戸こ津つ衛ゑい由元ゆげんもこれゆへに由元ゆげん尚なほ朝良あさら自胤しよくいんの隊たい附つれ。戦いくさに利りあり。共とも侶りの敗績さいしやくも及および大川おほがわ大田おほのの恩おん由元ゆげんと饒に落おさえ。反かへり朝良あさら自胤しよくいん胤いん鼓こ漏もらす。のる。と逆さか尋たづ思しを。則すなはち東峰とうほう萌も三さんと鐘かね船ふね

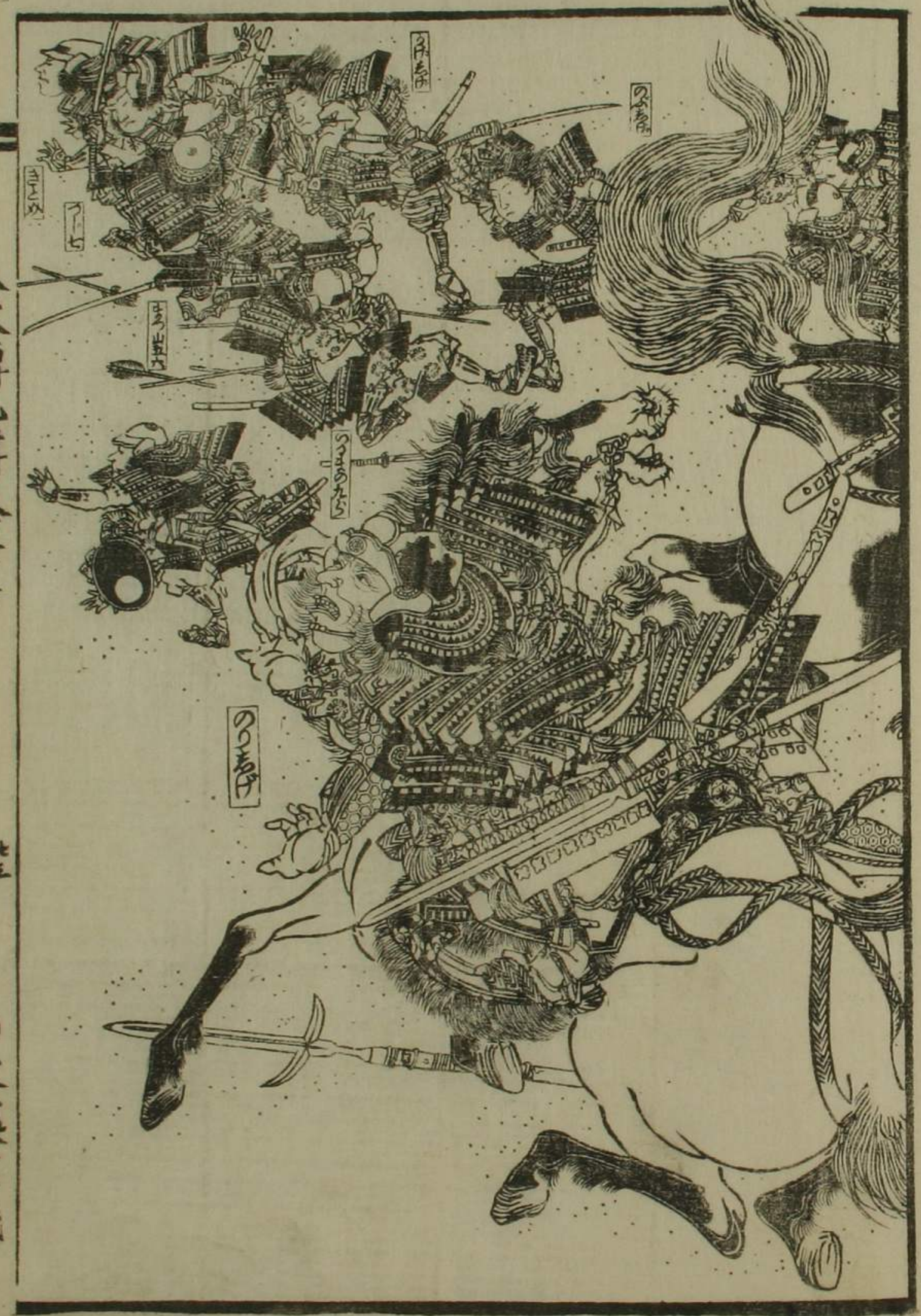
河原かわらの火ひを焼やす。皆みな共とも侶りの。小文吾せうぶんごを迎むかへ。登のぼり時とき小文吾せうぶんごの而頭じゆうづう人の戦功せんこうを譽ほめす。且朝良あさら由元ゆげんの援えんの兵へい船ふね多く出いで。載のり漕こ去さり。事ことの趣おもい告つぐ。朝經あさね俊しゆん故こ隊たい兵へいを憶おもひ俱ともに嗟なげ嘆なげして由元ゆげんを饒にと朝あさ良らと漏もらせし恨うらみるを亦またゆへに重じゆう時ときが徳とく々と大田おほのの意い衷しゆうを告つる。及および大おほ家け感かん服ふくを亦またゆへに然しかどもその時そのとき自家そのけの與よ軍師ぐんし大田おほの毛野もうの胤いん智ち豫よ計けいる所ところあり。小文吾せうぶんごの元もと重じゆう時とき朝經あさね俊しゆん故こ隊たい兵へいを是これを悟さとる者ものをゆへに并ひらを甚し摩まを。原はらる小始せうし洲しゆう寄きの陣じん營えいあり。毛野もうの胤いん智ち行ぎやう徳とく只ただ寄き隊たいの大たい將しやう胤いん谷こ朝あさ良ら千葉せんせ自胤しよくいん相あ從したがへ加勢かせいの隊長たいしやうも亦またゆへに大川おほがわ大田おほのの恩おん人ひと多おほ。稻いな戸こ津つ衛ゑい由元ゆげんもこれゆへに由元ゆげん尚なほ朝良あさら自胤しよくいんの隊たい附つれ。戦いくさに利りあり。共とも侶りの敗績さいしやくも及および大川おほがわ大田おほのの恩おん由元ゆげんと饒に落おさえ。反かへり朝良あさら自胤しよくいん胤いん鼓こ漏もらす。のる。と逆さか尋たづ思しを。則すなはち東峰とうほう萌も三さんと鐘かね船ふね

る小至りく愕然と覚る巻を捲るもあべ。休題却説大川莊介の目大石
 のの巻。とゆりやま。か。死力を竭して戦ひくを敢て人物ともせむ満呂
 再太郎安西就衆の他勇士猛卒とて。息をも類れど攻る程小初逃る
 寄隊の頭人宿尻城戸八萬戸月十字七入間九郎余山五六並小憲重が
 一二の家臣菅菰三布七関口小田八岸淳雜四郎と喚做を兵母返一
 合せ相控え。一重時ハ挑戦ふのう心後れ癢るれ。終つ亦復伐破ら
 せ。或ハ敷れく命を殞し。或ハ逃亡く恥を見え。既中々憲重ハ千騎カ
 一騎ハ身もとも。屍士卒と罵勵して馬上小鎗と打振々々近づく敵と突伏
 せ。大奮然。方老武者の本事小中者あ。ま。壯ハ遙小是を見て。怖れ馬を
 馳とせ。憲重と鎗と交へ。一上二下と術を盡し。大士自得の刀尖小憲重
 竟小争ひぬ。鎗を夏哩と反飛させ。大刀と拔んとせ。程小莊介。透させ。

鎗とせ。片頬を托地と撞く。憲重ハ横さる。小馬より撞くと打隊。一重
 時ハ起もぬ。う。安西就衆。満呂再太郎。俱ハ遙小是を見。飛が似く。小走り
 あり。折累りく。軒々と。壓さる。索を被ふ。憲重。虜小做り。く。殘兵。皆
 逃亡く。あ。閉戦果。ふけ。徳而大川莊介。五本松。陣營。退。則。犬田
 勝軍。あ。か。り。束。待。と。方。僅。其。報。あ。る。有。徳。り。一。程。小。満。呂。再。太
 郎。安。西。就。衆。ハ。御。向。小。虜。あ。る。大。石。憲。重。を。大。床。の。下。小。牽。り。く。あ。く。大。川。莊。介。
 實。檢。を。請。ひ。く。莊。介。則。諸。士。を。將。く。出。て。登。見。小。屍。を。櫛。く。憲。重。と。仇。見。て
 石。洲。憲。重。ハ。是。鎌。倉。兩。管。領。の。四。家。老。其。第。一。老。中。豊。嶋。大。塚。の。城。主。を。小
 年來。其。惡。を。佐。け。て。の。君。の。非。を。正。さ。ま。要。せ。し。刺。丁。田。町。進。卒。川。菴。公。鑑
 上。社。平。軍。木。五。倍。二。仁。田。山。晋。五。五。と。喚。做。一。奸。虐。の。酷。吏。諛。諂。の。侮。人。を。の。こ
 親。愛。あ。く。賞。罰。其。道。不。違。へ。思。ひ。さ。り。一。其。甚。麼。を。我。髻。歳。一。時。逆



莊介鎧どど
 捷ぐ且憲
 重を生拘る



旅小母を喪ひて。その身の所由るより。當時大塚の御士。大塚墓六が小
 厮あせしれ。年東他仕る程。東人夫婦の讒言敵と敷あり。因あんが報ひ。小
 汝あの敢是を賞せむ。及あく又那奸黨が忠義を賊情とひ。做あせる。誣言を信容
 せ。我を罪まる。死刑とひ。多あて法場小幸れ。折幸あひ。して我義兄弟大塚
 犬田大飼の救ひ。よりて萬死を免あき。且那冤家們を殺あし。今日あに至る。え
 我尙里見殿。未生の夙因あり。義兄弟等と共。今番の防御使を
 奉あらむ。言小汝。對面して。舊怨を復あす。日あり。名。夫一殮の惠も。必報あひ。匪
 皆の怨中も。必報あふ。志士の辭あせる。所あも。勇者の本意と。勇ある。所あも。若あれ。も
 我君里見殿。仁君と。ああのり。御向。犬田小文吾。妙見嶋の柵と。後あに。時。汝
 家臣彦別夜。又吾と。其隊兵百十數名。と生拘あり。小敢一人。も殺あさ。と。船あ小載
 甘あく流あし。遣あり。ああは。信あれ。今我も亦然あし。も汝を憎あし。と。首あを。削ある。小忍あん。と。異

日安房へ凱旋の日の命乞あして。然あでも。陳あさ。と。あり。や。と。同あ譴あら。む。と。
 害あ上あ黒あ。羞あむ。答ある。と。頭あを。低あく。跪居ある。を。屢あ問あれ。と。や。なあく。小あの。や。う。
 榮枯あ。寵辱あ。地あを。易あく。身あの。囚あれ。做あり。今あの。何あを。陳あさ。と。實あ小。昨あの
 非あを知る。不足あれ。後悔あの外あ。幸あひ。と。首あを。續あれ。と。永あく。德澤あを。仰あぐ
 下あ。と。謝あさ。と。莊あ奴あ。と。少あく。満あ呂あ。再あ。太あ郎あ。向あひ。と。名あ。と。汝あの。隊あ兵あ。一あ百あ名あ。と。
 路次あ。中あ。日あの。甘あ春あれ。と。ヨあク。蕉あ火あを。准あ備あせ。と。余あの。餘あの。の。箇あ様あ。と。言あ。
 詳あ小。吩あ咐あれ。信あ重あ。則あ。憲あ重あを。推あ立あせ。と。退あけ。と。馳あて。隊あ兵あ。一あ百あ名あ。と。
 守あり。と。路次あ。と。い。と。死あく。今あ井あの。柵あへ。と。免あけ。と。信あ而。當あ。晚あ。四あ鼓あの。比あ。及あ。小あ大
 田あ小あ文あ五あ口あ。満あ呂あ重あ時あ。看あ持あ。朝あ經あ。大あ樟あ俊あ故あ等あ。二あ四あ隊あの。士あ卒あを。相あ從あへ。と。
 五本松の陣あ。營あ。小あ。から。來あ。不あ。れ。が。莊あ。小あ。あ。れ。を。勞あ。と。勝あ軍あの。事あの。趣あを。諮あ問

糸小文吾則小梅の戦ひは自胤と虜にして今井の柵人遣せり。並に法谷柿八門を誅戮せし顛末を告ぐ。又以中ノ介後又朝経俊故が西國河原を朝良主僕を追伐し時稲戸由元の援兵あり。姑且勝負あり。由元亦重時を後よりて攻破せし。那身の主僕僅か二人深川のく不脱く。折我又是を追蒐けし。其兩個の敵一人の恩人由元をとりて。胡意一步の路を譲りて。那舊恩不報ひ。他入江の邊より。満呂復五郎が一隊の騎を趕逼らまき。免るべくもあらず。折く他水軍の援兵あり。其艦十艘雄兵三四百名許始に漕ぎ一箇の快船。朝良と由元をうち載せし。守り漕ぎゆた。一五二十を解し。社中も亦那水軍の自家の士卒を悟らむ。駭嘆して。原来敵の援兵あり。朝良と捕ゆ。遺憾のるれども。亦稲戸由元不報恩の第一義を我

のる。和殿さ徳不報不徳とて志を果せし。実不送の執び。非如朝良と漏れぬとも。寄隊の副將自胤を和殿の隊に獲ぬ。第一番の軍功あり。這里も亦開戦の顛末の箇様々々如此々々。今朝憲重の伏兵を重時を伐破らむ。事の始より社中が二隊をり。朝良を攻伐走らむ。竟不石の憲重を虜にける事の終まで送もる。報知されし。小文吾深く感嘆して。本意のる。これを稱ける。徳而当晚の陣に。無火を焼明し。猶且自家の刀。瀆見を勤り。其療治も。雨も。既にして。天の明く。社中。小文吾の。隨即地方の村正と。故老を。召て。昨日の邊と。西國河原を。戦死する自家の士卒。及敵の亡骸と。執集り。其四下る。寺院に埋葬る。皆言。課言。比皆ある。退りて。時を。程。猛可。其諸邑。社中。取合。下知。修。其。事。致。けり。有。修。程。北。兵。先。鋒。の。頭。人。妻。有。復。六。萩。野。井。三。郎。の。昨日。西。國。河。原。の。開。戦。北。兵。竟。不。敗。績。一。那

身の俱も小こ疾はを負おして。敵ての頭あ人ひと組ぐみと刺さんと思おもふをりて。胡こ意ご倒たれど。敵て者ものの屍しか骸がい小こ交まりて。俯うつく在あり。既いちて。稻いな戸ほ由ゆ元げんの朝あ良らと共ともに僅わずか三さん騎き辛かく命いのちを免まれど。深ふか川がわのくまへ落おちて。士し卒そつの敷しれど。或あるは逃にげて。敵て皆みな退ひ陣じん多おほく。其その本もと意いをなすま。故ゆゑに復また六むと三さん郎らうの俱も小こ惜お地ち身みを起おこして。當あた晩ばん深ふか川がわに赴おもむけど。由ゆ元げんの往むか方かたと攪まじりるも。他たのほ水みづ軍ぐんの援えん兵へい有ありて。朝あ良らと共ともに載のりて。漕そう去さるも。其その頭あの民たみの嗚なをきくも。心こゝろ安やすしと。次つぎのつぎ日ひ惜お地ち津つを求もとめて。俱も武ぶ藏ざうへ赴おもむけり。其その他た始はじより朝あ良らの従したがひて。那な隊たいの頭あ人ひと入い間ま九く郎らう松しょう山さん五ご六ろくの陣じん殺ころすも。えのちに又また宿しゆく尻しつ城じやう戸こ々々萬ま戸こ月げつ十じゆ字じ七しち及およびて朝あ良らの近ちか習じやく某なにか甲か某なにか乙おつの皆みな残のこ兵へいと俱も逃に亡なくて。脱だつ棄しるも。甲か曹そう執しやく送しやうけり。大おほ刀たう鎗しやうのつままてて。敷しれど。屍しか骸がいあらるも。稀まれに況いは見みの士し卒そつの敷しれど。いはけり。一いつ刀たう瘡そう見みも亦また見みるも。亦また里さと見みの君きみの残のこ兵へいを去さすも。欲ほしと。俊しゆん德とくの致しやくをきくも。心こゝろあらるも。人ひとのいはけり。介けい程じやう小こ。

這こゝろ葛くわ飾しやくの民たみ毎ごとに各おの々おの各おの各おの。食た壺か醬じやう醬じやうをた。五ご本ほん松しょう多た陣じん營えい小こ来ら加か賀かせり。开ひらかす中な行ぎやう德とく塩しん濱は並ならぶも。鄰とな里り近ちか郷じやうの民たみもも。俱も小こ文ぶん五ごの故ゆゑ郷じやう見みと相あ唱なへて。小こ舟ふねを齋い一いつ魚う菜さいを棒ぼうけり。俱も小こ泉い川せんがわを涉わたりて。多おほく其その功いさと稱なへり。仰あげて。敬けい賀がまる者もの甚おほく。始はじ小こ文ぶん五ご其その壯さうが。塩しん濱は小こ在あ陣じん存ぞん時とき大おほ田でんと相あ識しるも。者ものといいふも。寄よ隊たい大おほ軍ぐんの少せうえりとも。其その成せい敗ぱいと料りやうり難がたて詰つるも。稀まれに今いま全ぜん勝しやうの勢せいと見みて。蠟ろう見みの甘あま不ふ就じゆ不ふ似に。一いつ貴き一いつ賤せん交かう情じやうを見みるも。孤こ獨どく多おほ福ふく勢せい同どうくも。小こ文ぶん五ごの是ぜいを見みるも。嗟さ嘆たんまるも。敢あ受うけり。其その已いとも。其その西せいを取とりて。還かへりて。畢ひつ竟じやう大おほ川せんがわ大おほ田でん兩りやう防ぼう御ご使しの全ぜん勝しやうの戦せん功こうの既い小こ具ぐ多おほ又また洲しゆ寄き國こく府ふ臺たい水すい陸りく二に所じよの陣じん戰せん自じ他たの勝しやう負ふ甚おほ麻まをとりて。开ひらかす漸ぜん次じ小こ後ご々々の回かへりて。解とけり。分わるも。を聽きかす。作者さくしや云い。約やく這こゝろ水すい陸りく二に所じよの陣じん戰せんの勝しやう敗ぱい結けつ果くわの比ひ皆みな是ぜい。十じゆ二に月げつ初しゆの八はち日にち也なり。

同日の事之然とも今詳ふ是を編次る不及びて云所を駁雜して綴るべく
 もゆまの事初行徳口なる二天の戦功を具中畢て次小園府臺又
 其次小洲崎の水戦を具中一戦終り又一戦始る不中を俱是同日
 事ると看官宜く照見るべし蓋その水陸大兵大戦の一擧の予が腹稿
 二十餘年の今に至りて一事も透れ漏れをとり然ると人或は結局大
 園圓まで図せしむ第四輯小約束ありと予が透れ漏れを飲も
 人傳をのり其書言と作者の言を合さず欲る敬馬をなるといふに
 其言忠告不似ちるといふも予何を敬馬ん非除予が春意壽るも
 至るを前小約束ある事をいふと忘るるは鄙語小云細子流々落成を
 見え漏れざるべし其折鑄つべし

南總里見八代傳第九輯卷之二十七終

